

64 薛己の外科治療概念の考察

西 卷 明 彦

今日、日本における現代漢方において、薛己(一四八〇～一五五八)の影響は、直接的にはあまり大きいものではないと考えることができる。薛己は、その著書の和刻本は、十七世紀中頃より、十八世紀の始めまで、『薛氏医案』(十六種)『薛氏痘疹撮要』などが出版されているが、陳実功の『外科正宗』が、和刻本『(新刊)外科正宗』として、一六六三年に出版されると、薛己の著書の和刻本は、出版されなくなっていく傾向がある。中国伝統医学における外科治療概念は、『劉涓子鬼遺方』(五世紀)が最初とされ、その後しばらく停滞をみるものの、宋代に入り陳自明の『外科精要』が出版された。以後元代の齊德之の『外科精義』、明治の汪機らにひきつがれ、発展していくことになる。外科とは、中国伝統医学では、西洋医学の外科手術と異なり、癰疽や瘡瘍が、

外部に現われることからつけられた名称である。外科治療は、内治法と外治法の二種類に大きくわけることができる。これら外科の概念を大きく集大成したのが、明代の陳実功の『外科正宗』であり、前時代までの外科概念をまとめ、さらに平易に解説し、外科手術も加えた反面、教科書的である。事実、後の江戸医学館で、『外科正宗』が教科書として採用されたのも、また、薛立斎の著書が出版されなくなっていたのも、このような背景があったためと考えられる。『(新刊)外科正宗』は、十八世紀中においても日本で出版されている。

薛立斎の『外科發揮』、『外科枢要』は、病理論、治験の記載が多く、どちらかというところと応用の書として色彩が強い傾向がある。薛己の概念の中心の一つとなっているのは、『黄帝内経素問』の至真要大論で、中でも後世「病機十九条」と称せられる部分である。一般に、病証・病理とも、その変化は複雑多様であるが、臟腑の病位、五気の病機と病証との関係を「病機十九条」は、適確に表わしている。「病を治するに必ず本を求む」、「必ず其の主る所を伏して、其の因る所に先にす。」という

概念をもととし、「故に大要に曰く、謹んで病氣を守り、各々その属を司り、有る者はこれを求め、無き者はこれを求め、盛んなる者はこれを責め、虚なる者はこれをして調む。必ず五勝を先にし、その血氣を疎し、それをして調達せしめ、和平を致す、と。此れをこれ謂うなり。」と記され、病機に関係する原理原則が述べられている。外科疾患については、「諸もろの痛、痒、瘡は、皆心に属す。」とされ、外科瘡瘍とはいえ局部の病変ではなく、全身の病変の密接な関係があり、内治法を重視する重要な根拠となっている薛己は、一般論として、温補派といわれているが、治験例をみるとその限りではない。『外科枢要』に、「膿、いまだ潰れざる者は内消すべし。膿、これを潰れた後は托裏すべし。」と記され、病証にあわせて、適確に瀉法、補法を行うことが記されている。薛己は、診断として脈診を重視し、瘡瘍に関して、「始まる所は熱となし、終りは虚となるなり。」と、重要な概念を提示している。

『外科枢要』巻一、「瘡瘍腐肉を去ることを論ず。」の中で、例え腐肉があっても、針割、つまり外科的除去を

行わない方がいいと述べている。これは、内治方が適確に行われていれば、外科的除去は必要ないと考えることができる。薛己の時代は、もちろん抗菌剤がない時代であり、いたずらな外科的除去は、症状を悪化する原因であり、確実な内治法があるならば、より安全に症状を改善することができたと考えることができる。

(日本歯科大学医の博物館・北里研究所東医研)